

国際協力フィールドワークにおける 抽象的概念化を促す教育実践

加藤 俊伸ⁱ

Practical Education for Conceptual Understanding
in Development Studies Fieldwork Programs

Toshinobu KATO

キーワード：開発教育、国際協力、海外体験学習、サービスラーニング

1. はじめに

筆者は2018年度より年間2回のサービスラーニング科目でもある「国際協力フィールドワーク（フィリピン）」と「国際協力フィールドワーク（インド）」の海外フィールドワークを担当している。これまでに現地同行を含めそれぞれ2回実施している¹が、実感として海外フィールドワークでは学習態度も含め履修学生の大きな成長を見るケースが多い。その理由を明らかにすることを目的に「サービスラーニングにおける国際協力フィールドワークの学習成果発現の過程と教員の関与—フィリピン、インドの実践から」を『桜美林大学サービスラーニングの実践と研究』第1号に発表した。これは「国際協力フィールドワーク」における履修学生の、「気づき」、「省察」、「抽象的概念化」の学習過程²を分析し、それぞれの過程での効果的な教員の関与を論じたものである。その中で、「国際協力フィールドワーク」の学習成果発現にいたる特徴として、第一は現地研修での揺さぶられる「気づき」の大きさ、第二は途上国と日本の比較を通じて「抽象的概念化」を促し易いというその優位性を上げ、教員の関与としては1点目においては「振り返り」を通じて「省察」につなげるべく積極的に啓発しつづけること、2点目では日本との比較を積極的に提示することで「抽象的概念化」への方向性を意識させるべく関与することの有効性を指摘した。（加藤 [2020] 35-37）。

本稿は、この2点目の「抽象的概念化」を促すために弁証法的思考方法の提示という教員の関与の有効性について、実証的に分析を試みたものである。第2章では「国際協力フィールドワーク」科目の実践において「抽象的概念化」を促す教材としての「発展研究論文」³の位置づけを説明し、第3章で「発展研究論文」執筆における「抽象的概念化」を促す弁証法的思考方法を用いた教員関与の方法とその実践結果の分析を行い、第4章にて今後の研究上の課題などを提示する。なお、筆者は「気づき」、「省察」、「抽象的概念化」の学習過程を経て深くわかったという成功体験に基づき、他の社会問題に対しても関心を高め、自律的に同様の学習過程を繰り返すことが可能となるという持続的な学習態度・習慣を身につけることを大学での教育上の目標としている⁴。

ⁱ桜美林大学リベラルアーツ学群 兼 サービスラーニングセンター 特任教授

専門分野：国際協力

主な担当科目：国際協力入門、政府開発援助論、国際協力フィールドワーク

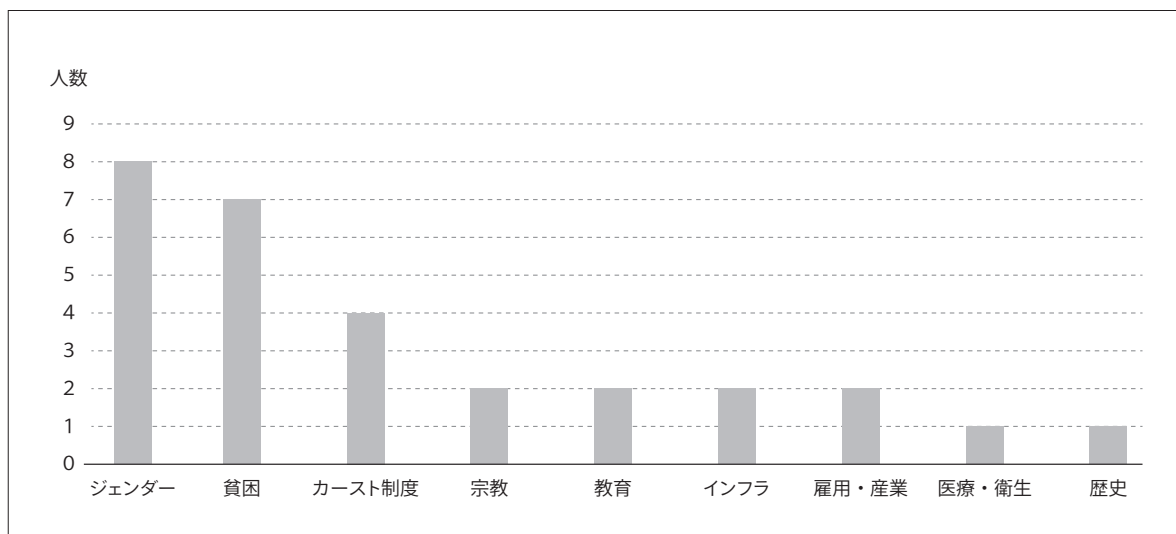
3. 実践報告・実践研究論文

2. 「国際協力フィールドワーク」学習過程における「発展研究論文」の位置づけ

「国際協力フィールドワーク」は事前学習、現地学習、事後学習の3段階で構成されている。最初の段階では、事前学習＝調べる、現地学習＝感じる、事後学習＝考えると単純化して履修学生に説明している。これは、現地学習で感じるまたは揺さぶられることが最大の学習の契機であり、事前学習はこの感じるための基本的な知識を得る段階、事後学習は感じた課題について可能な限り「抽象的概念化」を目指し考える段階と位置付けている。事後学習では履修学生が最も強く感じたことについて参考文献を読みつつ自分なりに掘り下げて調べ、8,000字以上の「発展研究論文」を完成させることを履修科目として課している。「発展研究論文」のテーマの設定は各履修学生に任せており、国際協力関係の課題を中心に周辺の社会科学系のテーマまで幅広い選択を認めている。これは、現地学習で最も強く印象に残ったことをテーマに学習を発展させることを企図しているためである（加藤[2020] 35-37）。

2018年度から2019年度の「国際協力フィールドワーク」のフィリピンの履修者は11名、インドの履修者は12名であり、対象期間の履修学生には留学生、日本以外の主な居住経験を有する学生はいなかった。履修学生のそれぞれのテーマと関係する課題はグラフ1の通りである。なお、テーマとして女性問題と宗教の関連性など、複数の課題に関係する発展研究論文については重複して数えている。関連する課題としてカースト制度を取り上げているのはインド参加の学生であり、ジェンダー問題はインドに参加した学生1名がLGBTを取り上げている以外は女性問題である。また、歴史は第二次世界大戦における日本とフィリピンとの関係を取り上げている。

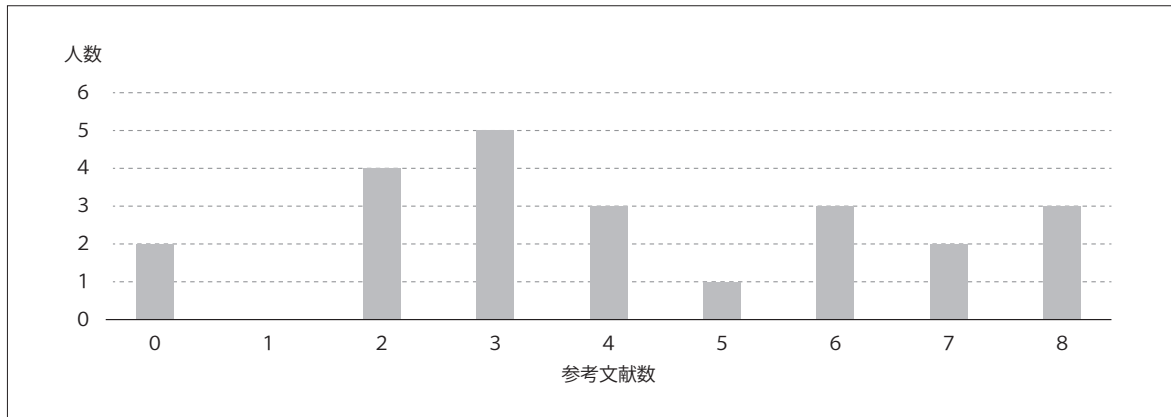
グラフ1 発展研究論文の関連課題



「発展研究論文」は、現地学習での「気付き」から「省察」へ、さらに、途上国の環境や異なる文化・社会環境を意識した上で「抽象的概念化」に至ることを目指している。現地学習での揺さぶられることにより得た「気付き」を契機にしているため、学生の学習意欲は事前学習に比較して事後学習の段階では格段に高い。自身の「気付き」から導かれた課題の社会的な背景や理由を考える「省察」を、論理的に考えること、自分自身の経験に照らし合わせること、さらに参考文献を読むことなどを通じて積極的に取り組んでいる。

3. 実践報告・実践研究論文

グラフ2 発展研究論文の参考文献数



とくに、多くの「発展研究論文」には自身が探した参考文献から履修学生が納得できる説明や課題を深める問いなどが引用されている。グラフ2は履修学生23名のWEB情報を除いた参考文献数である。参考文献数0の2名の内、1名はWEB情報を参考としており、もう1名は参考文献を記載していない。参考文献数のみではどのくらい深く参考文献を読み込んだかを判断するのは難しいが、現地学習において自分のものとなっている問題意識から参考文献を読み、様々な考えを知り自分なりに考えることは楽しいと感じていることが「発展研究論文」に記載された思考の発展過程を辿ることでも伺える。

3. 弁証法的思考方法の提示による「抽象的概念化」を促す教員の関与

「省察」から「抽象的概念化」に至る思考の深化は一般には容易ではなく、それを教えることはさらに難しい。筆者は方法論として弁証法的思考方法を提示することを「国際協力フィールドワーク」の中で試行している。それは、「抽象的概念化」を促すために、途上国と日本との見え方の異なる課題や課題解決の方法についてその背景にあるもの（できれば統合された概念）を考えることで思考の深化を促すという方法である。筆者が意識的にこの方法を提示するのは、自身の大学生の時の専攻が理科系であり、高校時代に学習した物理のニュートン力学の理論の理解において、判然としない状態からある瞬間にすべてがわかるという劇的な理解の転移（高次の理解）を経験したからかもしれない。

3-1. 弁証法的思考方法の提示

高次の理解は自身で経験し体得するしかできないが、それを促す方法として、筆者は弁証法的思考方法を、発展研究論文を書き始める前の事後学習において提示・説明している。これは、テーゼとアンチテーゼという矛盾した、または対立した命題を両立させる概念を考える（アウフヘーベン）ことで思考を深めていく技法であるが、それを単に説明してもイメージとしても伝わらない。社会科学のわかりやすい事例について理解し易いものを探したものの、単なる論理的矛盾を避けるための論理が多く、普遍化した理論や真理に至るといふ高次の理解⁵という感覚は伝わり難い⁶。このため、やはりニュートン力学の事例を用いることとした。具体的には月は地球に落ちてこないのに、りんごは地球に落ちるのはなぜかという問いを質問して、同じ法則に基づく現象であることを図と直感により説明し、その方法により別の世界の法則に従うと思われていた現象を統一的に解釈できる法則を見出せる可能性があることを言及している。そして、一件矛盾するまたは見え方の異なる現象の背後にあるものを考えることでより高次の理解に至る可能性があり、日本と途上国で一見異なる課題をこの方法で考えることにより課題の本質が見えてくる可能性を示唆している。

3. 実践報告・実践研究論文

3-2. 履修学生の「発展研究論文」の分析

履修学生23名が、上記3-1.の弁証法的思考方法の提示を受けて、実際に課題の比較検討を行ったか、そして「抽象的概念化」に至ったかを分析した結果が表1である。なお、「抽象的概念化」に至ったか否かの基準は、履修学生の発展研究論文の中心的な命題において他の事象でも応用可能な知識・ルール・スキーマやルーチンを自らつくりあげた部分があるかという点を確認した。なお、論理的な説得力が弱いものは「抽象的概念化を試みるも不完全」とし、「抽象的概念化」に向けての思考意識が弱いものは「抽象的概念化の意識が弱い」とした。

表1 履修学生の発展研究論文の分析表

発展研究論文数	比較の有無	比較対象	抽象的概念化の評価	
23	比較有 19	日本との比較 18 (内 日本及び第三国との比較 6)	抽象的概念化に至る	6
			抽象的概念化を試みるも不完全	8
			抽象的概念化の意識が弱い	4
		その他比較 1	抽象的概念化を試みるも不完全	1
	比較なし 4	抽象的概念化に至る	1	
		抽象的概念化を試みるも不完全	2	
		抽象的概念化の意識が弱い	1	

履修学生の多くは自分の設定する課題について、なんらかの比較を行っている。また、教員からの方法論の提示も参考に、直感としてもわかりやすい「日本との比較」検討が全体の8割を超えていた。「日本との比較」には、例えばフィリピンからの女性エンターテイナーの日本への出稼ぎ労働問題を論じるもので、フィリピン人女性と結婚した日本人男性の経験を綴った図書を比較参考文献としているものなども広義に解釈して含めている。また、「その他比較」としては、貧困問題へのアプローチをテーマとするもので、NGO活動とフィリピン政府の政策、政府開発援助（ODA）を比較するものがあつた。なお、比較の内容については、単に比較対象の現象のそれぞれの特徴のみを列挙する比較で終わっているものもある。「抽象的概念化の評価」については、自身でも納得できる統合化された概念に至っていないと考えられる「抽象的概念化を試みるも不完全」が一定程度存在し、「抽象的概念化に至る」と考えられるものは「比較有」の30%で、その全てが、比較を参考に「抽象的概念化」に至っていることから弁証法的思考方法を活用していると評価した。比較がなく弁証法的思考方法以外の方法で「抽象的概念化」に至ったものは、参考文献を読みながら様々な角度から課題を分析の上「抽象的概念化」に至ったものである⁷。

第2章で説明した通り女性問題と関係する課題を取り上げる学生が最も多いが、弁証法的思考方法を用いて「抽象的概念化」に至る事例が5例あり最も多かった。例えば、インドでは女性人権保護団体NGOを訪問した際にショッキングな男女出生率の違いの背景にある具体的な社会の問題を聞き⁸、さらに農村でのホームステイにおいて女子学生は夕食の支度などを手伝うが男子学生は厨房に入らないというような体験もすることなどがこの課題の「気づき」となることが多い。この「気づき」を契機として「省察」ではダウリーやサティ⁹などのインドの社会制度や風習を学生はさらに詳しく調べ、日本における女性問題を再度考えてみることとなる。例えば、ある学生は日本でも結婚において姓を変えるのは圧倒的に女性であることから最初に子供が接する社会としての家庭に着目し、また、別の学生は相撲の土俵に救命のために上がった女性看護師に降りるように促したというニュースなどから文化・宗教に着目する。そして、家庭や宗教の観点からジェンダー問題について日本とインドにおいて共通する要素を再構築し「抽象的概念化」に至ることとなる。

3. 実践報告・実践研究論文

3-3. 弁証法的思考方法活用の評価

3-2.の分析結果から、弁証法的思考方法を「発展研究論文」執筆の必須条件とはしていないにも関わらず、83%の学生がなんらかの比較を行い、半分以上の学生が弁証法的思考方法による「抽象的概念化」を試みている。このことから、弁証法的思考方法の提示については多くの学生は少なくとも理解しそれを試みており、方法論としても教授できることを示している。

一方、弁証法的思考方法による「抽象的概念化」を試みた学生の内、「抽象的概念化」までに至った学生が40%であったことから、この達成率の改善が期待される。事後学習において、「発展研究論文」執筆前の弁証法的思考方法の提示の他に、執筆段階で2回のコンサルテーションを授業で行い、希望者には個別相談を実施し、日本の事例の提示や関連する参考文献の提示を個別に行っている。それをヒントに執筆を進める学生も存在するが、提出締切り（十分な執筆時間を確保しているものの往々にして執筆は期限近くになってしまう傾向がある。）が近づくと構成を変えるのは難しい。時間的制約はあるものの、個別のアドバイスが最も有効であることは疑いない。

4. おわりに

本稿では、弁証法的思考方法の提示による教員の関与が「抽象的概念化」を促すという一定の教育的効果があることを提示した。しかしながら、「国際協力フィールドワーク」を実質的に担当した当初よりこの弁証法的思考方法の提示を行っているため、その関与の有効性を検証する目的で方法論を提示しなかった場合との比較は行ってはいない。機会があれば、さらなる比較分析などを行ってみたい。ただし、第3章で述べた通り、弁証法的思考方法を経ることにより「抽象的概念化」の「自らつくりあげる」という要素がより強くなることを指摘したい。

一方で最終的な目標としては、「抽象的概念化」の学習過程を経ることで、深くわかったという成功体験に基づき、他の社会問題に対しても関心を高め、自律的に同様の学習過程を繰り返すことが可能となるという持続的な学習態度・習慣を身につけるということを筆者は掲げている。この目標については、「発展研究論文」の完成が深くわかったという成功体験となっているかということと、持続的な学習態度・習慣を習得できたかという2つの要素を検証する必要がある。前者については「発展研究論文」にフォーカスしたアンケート調査を行うなどの方法も考えられ、後者を検証するためには、履修学生の卒業論文などの他の成果の評価などをレビューする方法があると考えられる。

これらの点に関し、「発展研究論文」の提出期限が迫る中で自分なりに納得できる結論に至るために提出期限を過ぎて評価対象とならなくとも再提出したいという申し出などに接することもあり、実際にフィリピンやインドで体験して得た問題意識について自分なりに納得して書き上げたいという意欲や提出時のメールからその達成感に接することもある。また、第1章で言及した通り、とくに「抽象的概念化」まで達成した学生の履修後の活動や発表においてその成長を見ることも多く、この目標へ至る過程には一定の妥当性があると筆者は考える。

¹ 2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、春学期の「国際協力フィールドワーク（フィリピン）」は中止、秋学期の「国際協力フィールドワーク（インド）」はオンラインでの実施となった。

² 和栗は大学教育を対象としてKolbの経験学習モデルについて、具体的体験→内省的な観察→抽象的な概念化→能動的な試み→具体的な経験という循環モデルで概観している（和栗 [2010] 87）。本稿で

3. 実践報告・実践研究論文

は、これを参考に「国際協力フィールドワーク」を対象に履修学生の思考過程に注目し、「気付き」→「省察」→「抽象的概念化」の3段階とした。「省察」は気付きを社会的課題として捉えていく中間的思考課程とし、「抽象的概念化」はKolbの経験学習モデルの「経験を一般化、概念化、抽象化し、他の状況でも応用可能な知識・ルール・スキーマやルーチンを自らつくりあげることがをさす。」（中原 [2013] 7）に準じる。なお、「振り返り」はこの「気付き」と「省察」を促す活動とする。

³ 「発展研究論文」とはゼミ論文に相当するもので、それを発展させて卒業論文とする場合もある。

⁴ 「能動的実験や具体的経験をともなわない内省的観察・抽象的概念化」は、「抽象的な概念形成」に終わり、実世界において実効をもたない。また「内省的観察・抽象的概念なしの能動的実験や具体的経験」は、這い回る経験主義に墮する傾向がある。（中原 [2013] 7）との人的資源開発の観点からの中原の指摘もあるが、筆者はとくに大学教育においては後者の事態を避ける学習習慣獲得の重要性を指摘している。

⁵ ここで佐藤 [2018] を参考に、この「高次の理解」を改めて考えると、テーゼとアンチテーゼより高い階層における法則や理論などの関係性の理解であり、「抽象的概念化」とは単なる概念の把握ではなく、概念相互の関係性を理解することであり、逆に関係性から概念が形成されることがわかる。

⁶ 実際には普遍的な理論や真理は簡単には見つからないが、この方法論の有効性を学生にわかりやすく伝えることが求められる。

⁷ 分析対象以前の「発展研究論文」には、すでに国際社会で形成されている国際規範などに現地での経験事例を当てはめてその規範を検証するという方法で「抽象的概念化」を志向するものもあった。これは厳密な意味では「自らつくりあげる」ことにはなっていないが、「わかった」という再発見に至る思考過程であり、教育的視点から考えると「抽象的概念化」に至ったと同様の効果があると筆者は考える。

⁸ インドの女性人権保護NGOにおいて、インドにおける男児・女児の出生率が自然出生率以上に男児が多い現状、違法な胎児の性の確認や堕胎、農村での女児殺しの具体的方法などを聞き、多くの学生が衝撃を受ける。

⁹ ダウリーは結婚時に新婦側親族が新郎側親族に与える資産（結婚持参金）、サティーは寡婦の殉死、いずれも現在は法的に禁止されているインドの女性問題として代表的な社会制度・風習。

【参考文献】

- 加藤俊伸 [2020] 「海外サービスラーニングにおける学習成果発現の過程と教員の関与—フィリピン、インドでの国際協力フィールドワークの実践から」『桜美林大学サービスラーニングの実践と研究』第1号 34-41頁
- 子島進・藤原孝章編 [2017] 「大学における海外体験学習」『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版 1-19頁
- 佐藤文隆 [2018] 「物理学と力学のツールの性格～「AI時代」の物理教育とは」『物理教育』第66巻 4号 275-278頁
- 中原淳 [2013] 「経験学習の理論的系譜と研究動向」『日本労働研究雑誌』No.639 4-14頁
- 藤原孝章編 [2017] 「海外スタディツアーにおけるルーブリックの作成と活用」『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版、45-59頁
- 箕曲在弘 [2017] 「海外スタディツアーにおける授業づくり アクティブラーニングにおける「関与」を中心に」『大学における海外体験学習への挑戦』ナカニシヤ出版、26-42頁
- 溝上慎一 [2014] 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂 3-65頁
- 和栗百恵 [2010] 「「ふりかえり」と学習—大学教育におけるふりかえり支援のために—」『国立教育政策研究所紀要』第139集 85-100頁